



音楽のよろこび

2024年 11月25日 No.61
発行文責 担当事務局
田中正恭 田村乃里子

早いものでもう11月末、あまり季節感を感じるヒマもなかったような…。今は初冬かな。
9月の小味渚さん+豪華メンバー（杉江さん、沼光さん）の講座、皆様いかがでしたか。

講座の時間内ではとても話さきれない、そんなギッシリで聞きごたえ満点の小味渚さんのお話でしたね。何度も聞きたい内容、今回も私どものできる範囲で「まとめnote」を私達の責任で作成しました。皆さまが振り返る時の資料にしていただけると嬉しいです。

Vnの杉江さん、Pfの沼光さんも、小味渚さんの意図通りと言いますか、素晴らしい演奏をしていただきました。ブラームスの「ヴァイオリンソナタ・雨の歌」は小味渚さんの言われた通り、「ヴァイオリンソナタ」と銘打たれておりますが、本当はドイツ譜では（Sonate für Violine und Klavier Nr.1 in G-Dur, "Regenlied" Op.78）つまり、「ソナタ・ヴァイオリンとピアノのための第一番ト長調「雨の歌」作品78」となっており、本質的には二重奏なので、二つの楽器の演奏ではじめて成立する、ピアノは伴奏ではなく対等のパートナーとして書かれている作品です。

私（田中）は「仕事から」リハーサルの際にも、いなければなりません。その中でもお二人が「対等に」「ここは……」「そこは……」と互いを尊重しつつも意見交換され曲が作られていく、生々しい時間を実感しておりましたし、小味渚さんのお話はよくわかりました。

講座が終了後、杉江さんと少しお話をした時「沼光さんは指揮者の様なスゴイお方」と言われており、そういう方と共演できる幸せのようなものを、杉江さんは感じているのだなと思いました。そういうお二人の演奏が聴けた私達が、本当は一番幸せだったと気づいた、そんな講座でした。



沼光さんはアンケートをじっくり読みたいと言われましたので、後日コピーをお送りしました事、皆様にご報告しておきます。

★さて本日は、オーボエの 戸田雄太さんです★

オーボエは難しい楽器と言われていますが、その理由の一つにリードがあります。前回のオーボエの講座では、リードを手作りされる職人技に驚きました。戸田さんもきっとスゴイ技をお持ちだと思います。その音色を楽しみたいと思います。



～アンケートから～

いつもアンケートにご協力
ありがとうございます。
アンケートは一部抜粋したのもの
あります。ご了承ください。

とても有意義な講座でした。曲や作曲家の解説に素敵な演奏を聴かせていただいて、とても贅沢な時間でした。曲のこと等何も知らないで、曲そのものを楽しむのも好きなのですが、曲が作られた時代や作曲家の思いなど知ることで、曲の聴き方や感動が変わってきます。小味渚さんのお話の冒頭で、人類の起源とともに音楽があったということを知り、人類が言葉を獲得する以前、音や音楽がコミュニケーションだったということを知ったことを思い出しました。

音楽（音）は、私たちの身体と精神に染み付いているもので、だからこそ、音楽で共感したり、連帯できたりするのだ、と改めておもいました。もっと、お話をお聞きしたかったです。ありがとうございました。（S・Tさま）

本日は教室に早く着いた。前から2列目の鍵盤がよく見え「カプリツキ」左耳が少し難聴のため演奏者に向かって左側に座り右耳で音楽を聴くようにしている。前半の音楽の歴史は私にとっては、初めて聞くもので中世・ルネサンス・バロック・古典・近代に移ると共に楽器も作曲家・演奏家・聴衆の要求に応えるように発展してきたと理解した。少し物知りになった気がしました。後半、最初の曲はペルト作曲、変な感じがする曲、人により好みが分かれそう。あとの4曲は楽しい曲でうっとり。ピアノは大きな音が出るよう金属で補強されたとのこと、ヴァイオリンは400年ほど前に今の形に完成したらしい。今日はピアノとの二重奏で、ピアノの乾いた音とヴァイオリンのしっとりした音で、胸にしみわたる至福の時間でした。ありがとうございました。

いつもは楽器を中心とした講義ですが、今回は小味渚講師より音楽の歴史とその歴史を作ってきた作曲家の話、そしてピアノについての歴史等「音楽」について講義いただき、大変参考になり、学習させていただきました。いつもながら、杉江さんのヴァイオリン、沼光さんのピアノ演奏は素晴らしく、楽しませていただきました。この演奏と作曲家と作品の解説を小味渚講師が加えて頂いて、立体的な講義となり、わかりやすく感謝です。

音楽の歴史、ピアノの構造などわかり易く説明いただき、改めて音楽に対する興味を持つことができました。後半は、作曲家の時代背景などを学んで楽曲を聴くことにより、これまでとは異なる音楽を楽しむことができました。本日はどうもありがとうございました。のだめカンタービレのピアノ演奏の話は目からウロコでした。（荒井さま）

今回もとても興味の深いお話でした。バロックが終わりを告げたと考えられたのが、バッハの没年であったと定義された事が、とても面白いと思いました。初めて聴いたエストニアのペルトの曲もとても不思議な音色で、いつもと違った世界観でした。ラフマニノフのヴォカリーズも好きな曲なので近くで演奏が聴けて良かったです。2050年、どんな音楽が世に出ているのでしょうか。

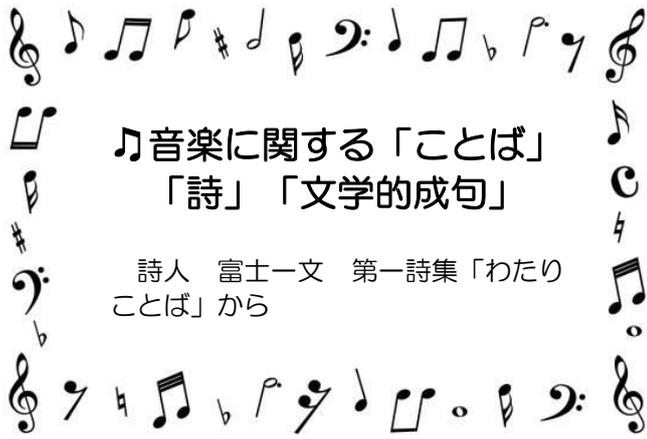
音楽の歴史から始まり、曲の背景を知り、これから聴く時の大きなポイントになることを知りました。バイオリン・ピアノの演奏、大変良かった。楽しめました

150年周期の音楽時代、目からウロコの感でした。2050年にはこの星から出て行っていると思うし、それを確立させるには、少し時間が必要になると思うと、前の150年から今の音楽を楽しめれば良いかなと思ってしまいます。（布川博さま）

音楽史のお話、興味深く楽しかったです。また来ていただきたいです。小味渚さんのお仕事のうち、次回はまたホールのお仕事、音楽評のお仕事についても話を聞いてみたいです。ありがとうございました。今年度の講座のうち、特に先月と今月を楽しみにしていました。期待通り普段聞けない貴重なお話が聞けて楽しかったです。

音楽の歴史をわかり易く大きくとらえて解説いただき、今までずっとなぜクラシック音楽＝バッハ～モーツァルト、ベートーヴェンとして誰も皆、追求している（？）のかという疑問が解けてきました。やはり、私はロマン派が大好き！シューマンの献呈をすばらしく弾いて頂き、天国にいるような気分になりました。ブラームスもピアノとヴァイオリンのかけ合いが大変心地よくいい曲だなあと！たくさんの演奏と準備、ありがとうございました。（東村さま）

本日の講座は、前半のお話が分かったようで分かっていなかった事が多くあったように思います。最初に見たイラストによる音楽の歴史は、スピードは速かったけど楽しく学べました。ほんの少しですが、音楽に携わっている者として、もう一度本を読み返したくなりました。後半は演奏も入り、ヴァイオリンとピアノの美しい音色も聴けて良かったです。



音楽に関する「ことば」 「詩」「文学的成句」

詩人 富士一文 第一詩集「わたり
ことば」から

《各号スペースがあれば、田中の独断でい
いな〜と思った「ことば」や「詩」・文学
的成句などを書いていきます。》

詩人 富士一文さんの詩集から、今年5月に発
刊されたばかりです。この詩集は、京障連（京都
障がい児者の生活と権利を守る連絡会）の機関誌
「ひゅうまん京都」（月刊）に連載して来られた
ものを一冊としたものです。

美しい装丁は、ますいあけみさん。この方はコ
ロナ禍の際、本講座はDVDを作成し受講生さん
にお送りしましたが、その時お世話になった美術家
さんです。

富士さんはご自分の感受性豊かな精神を、優しい言葉とし
表現、発信されています。

芸術とは…音楽とは…などと深く考える事は大切でしょ
う。でも「この世界」そして季節を（秋）を自分を通して精
一杯受けとめ、詩として美しく昇華することから、この人の
人生そのものが「芸術」となる事もあるのかなと思ったりし
ませんか。

「この世界 秋の芸術」をいつまでも平和の中で、と思っ
たり、ちょっと深読みがすぎるでしょうか。（田中正恭）

この詩集を私にポンと渡してくれたのは、事務局のKさん。
ありがとうございます。



次回は1月20日(月)

会場：鴨沂会館

13:00開場 13:30~15:30

ニューイヤーコンサート

金管五重奏です。トランペット：稲垣路子さん 新穂優子さん
ホルン：水無瀬一成さん トロンボーン：戸井田晃和さん
チューバ：ピーターリンクさん 元気がでること間違いなしです♪



芸術の秋

富士一文

本を読んだり、スポーツしたり。
いろんな秋があるけれど。
秋の神様いるのなら、きつと芸術の秋が好き。
入道雲を細かくちぎって、うろこ雲に作り変えたり。
青や緑の草木の葉っぱを、赤や黄色に塗りたくる。
セミの合唱は好みではないと
スズムシ、マツムシ、カネタタキ。
もろもろ集めて演奏させる。
見える全てが題材で、触れる全てが材料で。
今ひと時のこの世界、全部全部が秋の芸術。



×

⊖